

わが国唯一の「医の博物館」



私は、両学部の新入生オリエンテーションの冒頭に、決まって麻酔法の発見者 H.Wells の肖像をスライドに映す。キョトンとする彼らに、「医学の三大発見の一つ、麻酔法を発見したのは歯科医師なんですよ」と説いた。

元々、歴史に興味のある人と無い人は半々だが、自分の専門とする学問の歴史に無関心な人は軽侮する。私は、中原 實、山崎 清 以降途切れていた歯科医学史のあとを継いだ。

当時、非常勤講師の本間邦則（第45回卒）が、日本歯科医史学会を牽引する医学史家であった。たまたま彼は、新潟県の山形県境の府屋に開業していた。癩癖で、本業を放って医学史研究に没頭していた。

私と本間は、学内外の手近な史料を掻き集め、昭和52年（1977）4月、新潟歯学部の本館2階の倉庫に歯科医学史料室を開設した。“中原の趣味”と冷かされながら、10余年間、年々、窓のない一室に収集史料がふえて収容しきれなくなった。

8号館の新築を機に、その2階に公共的なミュージアムを計画し、50坪の展示室を設けた。建築の最中、本間がCを患い医科病院に入院した。竣工後、毎日、彼は病室から展示室に通った。ふたりで、陳列ケースに展示物を並べるのに3ヵ月かかった。

古医書や医療器具等が、広くはないがモダンな室

を所狭しと埋めつくした。収蔵品は約5,000点、すべて本物で、すべて寄付・寄贈に由った。

医学博物館では固すぎるので、「医の博物館」と命名した。当時は、珍しいネーミングだった。公共の博物館として県の指定をうけた。わが国最初の医学博物館であり、30年たった現在でも唯一の医学博物館である。

平成元年（1989）9月4日、開館式には県内のメディアが蝟集した。テープカットでは、私は一生に一度のフラッシュの嵐を浴びた。学内外の人々が、館内に群れあふれた。じきに、博物館は新潟歯学部の目玉になった。内外から客人がくると、みな、真先にここへ案内した。

パリ第七大学のあの仲好しの Kelerman 教授夫妻は、「なぜ Fauchard が、ここにあるの!？」と、黄色い悲鳴をあげた。「パリにもないわよ!」彼女の瞳には、歯科医学の祖 P.Fauchard の『外科歯科医』の初版、第二版、第三版、独乙語版の原本が並んでいた。

同志本間邦則は、開館を見届けて翌年10月12日に58歳で亡くなった。

(写真：開館式後の懇親会。左から谷津三雄〈日本歯科医史学会理事長〉、本間邦則、中原 泉、蒲原 宏〈のち日本医史学会理事長〉)